

[図画工作・美術]

創作活動と鑑賞活動との関連に関する一考察

- 5年生における工作の実践より -

古田 純*

1 はじめに

図画工作の時間、担当する学級に向かうと、子どもたちが、今か今かと待っている。「先生、今度は何をつくるの?」と数人の子どもが声をかけてくる。子どもたちにとって造形活動を行う時間は何物にも代え難い楽しみのようなものである。学習が始まると、つくり、つくりかえる行為の連続により、自分の表したいイメージに向かって制作を続ける。その行為は、大人や教師が考えるほど難しいことではなく、子どもたちの中で、行き詰まれば線を消して次に書き換える、色を変えてぬる、そのまま次へ進む、友達のやり方をみて取り入れてやってみる、など多様で個性的な造形行為が行われているのである。そして、ある程度の時間が経ったころ、作品を持って教師の所へやってくる。「先生、できました。」子どもたちは存分に造形活動を楽しんでいるように見える。

ここに一つの疑問が生じる。なぜ子どもは教師のもとに、自己の作品の完成を確認しに来るのであろうか。教師が、「よくここまでつくってきたね。こここのところ、もう少し直すと、もっとよくなると思うよ。」と言葉がけをすると、素直に席に戻ってつくり続けて修正してくる。この場面そのものは、題材におけるねらいから教師が行った指導を子どもが受けとめ、さらに取組を行い完成させたという、ねらいをもった学習としての正常な一場面であることに間違いはない。しかし、できたと感じた子どもに、言葉をかけることでさらに作品が変化することを、どうとらえればいいのか。教師としての意図が入っているのだろうか。それとも、子どもの側に、そもそも完成のイメージが希薄で、指導の言葉でいとも簡単に作品がつくり変えられてしまうのだろうか。であるとすれば、教師は、ねらいをもった学習の背後に、指導という名のもとに、ある方向へ作品づくりを行わせる意図的な誘導が行われていないか、常に一定の警戒心もちながら指導にあたる必要があるといえる。

筆者は、ここに一つの方策を考えることにした。それは、教師が活動を誘導して作品のできを決めるのではなく、作品づくりに参考になる作品を見て、それについて話し合う場を設定し、子どもが自らの考えを確かめる機会を与えることで、自分でこれが完成だと自信をもっていえる造形活動が展開できるのではないかということである。そのために、学習過程の最後でなく、途中で鑑賞活動を位置づけることで、上記のことが行えるようにするのである。そのような意図的な鑑賞活動を構想し、造形活動の様相の変化や完成を自分で決められることを、子どもたちの姿からとらえていこうと考えた。

2 研究の目的と方法

本研究では、鑑賞活動の定義を明確にした上で、作品づくりを助ける鑑賞活動を学習過程の途中に位置づけたことによる、教師の指導の言葉に影響されすぎず、自分の見通しと意志で作品をつくっていくという子どもの作品づくりの変化を検証していくことを目的とする。その方法として、5年生の工作題材での実践による子どもの作品の変化、鑑賞カードの記述の変化を考察していく。

3 研究の内容

(1) 鑑賞のとらえ方について

「造形教育事典」によれば、鑑賞教育の目的は、「子ども一人一人の美的価値観の形成」にあり、その中核は審美的鑑賞である。その審美的鑑賞は、単に美を受容するのではなく、「対話を通じた美の思索」であると述べている。審美的鑑賞を深める対話とは、指導者がとらえた作品の造形美にかかわる言葉がけと、子どもが感じたことを表した

* 上越市立大町小学校

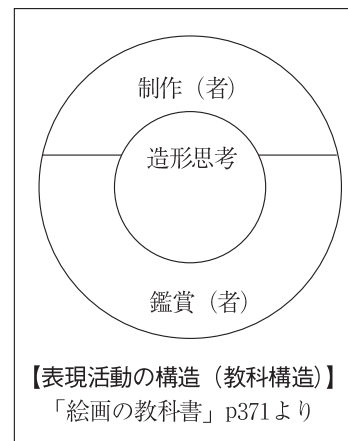
言葉との往復により、鑑賞が深まると述べている。(p475 (3) 審美的鑑賞と美の思索)

また、泉谷淑夫は、「絵画の教科書」で教科構造図を提示し、「鑑賞に対置すべきものを制作とし、両者の共通の基盤として造形思考という領域を設定し、3者の有機的な関連の中で表現活動がスムーズに展開していく」(p371)と述べている。続けて泉谷は、「視覚を通して考えた経験を客観化し、確実なものとするためには、文章化するのがよいでしょう。『書く』ことでさらに『見る』態度が育つのです。」(p372)と述べている。

これらの解釈をまとめると、表現は、制作と鑑賞の密接な関連のもと、指導者と子どもとの対話によって深められていくと理解することができる。

(2) 学習指導要領における「鑑賞」のとらえ方について

次に、学習指導要領では、鑑賞についてどのように考えているのであろうか。周知の通り、平成20年3月に新しい学習指導要領が告示された。その「図画工作科改訂の基本方針 (i) 改善の基本方針」の4番目に、「よさや美しさを鑑賞する喜びを味わうようにするとともに、感じ取る力や思考する力を一層豊かに育てるために、自分の思いを語り合ったり、自分の価値意識をもって批評し合ったりするなど、鑑賞の指導を重視する。」(p3)と述べられている。平成10年度版の図画工作科の改訂の趣旨では、我が国やアジアなどの諸外国の美術文化にかかわる鑑賞の充実と地域の美術館等の活用と鑑賞の独立した指導について述べられていることと比べると、言語を介したコミュニケーションによる鑑賞活動の実施という、鑑賞の方法まで明言する表記となっている。ここから、表現と一体となって展開する鑑賞について、かなり具体的な記述がなされているととらえることができる。



次に、各学年の「B 鑑賞」の記述をまとめると、鑑賞の対象は、

「自分たちの作品、身近な材料、身近な美術作品、製作の過程、我が国や諸外国の親しみのある美術作品、暮らしの中の作品」(以上、筆者が同学習指導要領の各学年の記述をまとめたもの)

であり、話し合いなどを行いながら、

「形や色、表し方の面白さ、材料の感じ、いろいろな表し方、材料による感じの違い、表し方の変化、表現の意図や特徴」(以上、筆者が同学習指導要領の各学年の記述をまとめたもの)

について、とらえるものであり、そこで形成したい資質や能力は、[共通事項]から抜き出すと、

「形や色、組合せなどの感じ、動きや奥行きなどの造形的な特徴について、自分の感覚を通してとらえたりイメージを形成したりすること」(以上、筆者が同学習指導要領の各学年の記述をまとめたもの)

となっている。これらをまとめると、表現や鑑賞における造形活動や言語活動を通して、以上のような造形的な特徴について理解したり表現したりできればよいことが理解できる。

具体的な姿として、「小学校学習指導要領解説 図画工作編」の高学年の記述を引用すると、「また、鑑賞活動において、作品から得た自分の印象や情景、全体的な感じなどを、形や色などの造形的な特徴から説明したり、友人と話し合う際の根拠として用いたりすることも考えられる。」(p56)とあり、共通事項の内容を重視するには、「形や色等の特徴について児童自身が気づき、表現を深めるようにする必要がある。例えば、児童が、形や色、動きや奥行きなどを表現や鑑賞の活動で活用している姿を適切に取り上げるなどして、児童の活動をより具体的にすることが考えられる。」(p55)と記述されている。

(3) 本研究における鑑賞について

本研究での鑑賞活動は、時間を特設した本格的な鑑賞ではなく、表現活動をよりよいものにするために、制作途中で設定し、表現の深化のヒントになったり自己の作品の完成を決定するための資料になったりすることをねらうものである。したがって時間を多くとらないこととした。

4 実践の実際

(1) 実践の構想

題材は、ソーマトロープ(残像効果で、絵が動く楽しさ、面白さを感じることのできる仕組み:「図画工作 教師用指導書上巻研究編5. 6年上p78)による工作を取り上げた。これは、表裏2枚の絵を回転させることで、2枚の絵が混じって動きのあるように見える技法であり、簡単な仕組みを生かして絵の合成を楽しみ表現する工作である。この題材の特徴は、工作を通して、絵を合成すると思ってもよらない新しい見え方をするという、絵のとらえ方の拡張

にある。絵は動かすことができる、合成するとさらに面白い表現ができるという、絵の概念の拡張を子どもたちに体験させようと考えた。

題材の展開は、次のように構想した。

○第一段階（2時間）

- ・例示作品を提示する。
- ・直径9センチのソーマトロープを思い思いにつくる。

○第二段階（1時間）

- ・作品鑑賞会をして、友達の作品のよいところに気付き、自分に生かせる点を考える。

○第三段階（1時間）

- ・基本的な条件をおさえ、自分のアイデアがより表現できることを考えて、直径17センチのビッグ作品をつくる。
- ・作品づくりを振り返って、気付いたことなど自由にカードにまとめる。

第一段階では、作品づくりの簡単な説明とともに、参考作品を子どもに提示し、実際に回転させる。子どもたちが実物に触れることで、仕組みの理解を容易にし、アイデアがわいて造形的な思考力を発揮しやすくなると考えた。

第二段階では、お互いの作品を鑑賞し合う活動を行う。通常、自他の作品を見合う鑑賞活動は、学習の終盤で行うことが多い。しかし、中盤で、鑑賞活動を行うことで、お互いの作品のよさに気付き、作品づくりのポイントを考え、その後の自分の作品づくりに生かせると考えた。この鑑賞活動による話合いで、友達の作品に学び、自分の作品づくりに積極的に生かせると考えた。

第三段階では、第二段階で話し合っただけで明らかにした作品づくりのポイントが十分発揮できるビッグ作品づくりを行う。直径17センチで面積が最初のソーマトロープの約4倍のビッグ作品をつくることで、それまで学んだことを十分発揮し楽しむことを通して、絵を動かすと面白い効果を生むことを実感できるようにした。

(2) 第一段階の様子

第一段階では、絵が回転により合成されるというソーマトロープの仕組みを理解し、いろいろ試しながら自分の作品をつくる。子どもたちが題材と学習課題に出会う最初の場面で、絵が動くソーマトロープの仕組みを使って面白い作品をつくらうと課題提示したあと、参考作品を子どもたちの前に出し、教師が回転させて絵が混じって見える様子を見せた。言葉での説明とともに、実物でやって見せた方が、仕組みや作り方が一目瞭然と理解できると考えた。その後、8本ほど用意しておいた参考作品を自由に回して試してよいことを知らせた。見せるだけでなく、自分で回してみることが、作品づくりの大きな手立てになるはずである。子どもたちはすぐに参考作品のところに集まり、実際に回してみても作品の仕組みや絵が混じる効果の実際を確認した。試している途中でこうやりたいというアイデアがわくと、自分の席に戻っていった。そして子どもたちは、直径9センチのソーマトロープ作品を次々とつくった。活動後に記録されたカードを見ると、「一つ目の作品は、色がよくなかったから、そこに気をつけてつくった。」「もっと別の絵を表と裏で組み合わせると面白い合体ができそうだ。」「表と裏の絵の位置がずれたから、もっと修正してぴったり合うようにした。」など、自分の作品づくりの変遷の様子が書かれていた。ソーマトロープの仕組みが簡単なため、次から次へと思いついたアイデアを作品にしていた。題材がもつ仕組みと絵の組合せによる面白さを、自分なりに追求しながら楽しんでいった。

第一段階を終えた子どもたちの感想を、【表1】にまとめた。これから分かる通り、つくった個数の多い子どもは肯定的な自己評価をしやすいいえる。子どもの感想を読むと、どうしたらうまくできるかといった構想にかかわることについて、形や色、絵の位置、動きの見え方などの言葉を用いて書いてはいるが、造形的な特徴について意識的とはいえない。どちらかといえば、国語の感想文のような表現である。そこで、第二段階の学習活動で、鑑賞会を行い、よりよい作品づくりのポイントを、子どもが造形的な特徴から考えていけるようにした。



【表1】第一段階後の自己評価とつくった個数

		つくった個数				
		5個	4個	3個	2個	1個
自己評価	うまくできた	1	12	8	3	
	普通			4	3	1

(3) 第二段階の様子

第二段階では、仕組みを理解し一通り作品をつくった子どもたちが、さらに表現方法について深く考え、自分で感じた面白さを追究しながら、自分で作品の完成を決められるような鑑賞活動を行う。この鑑賞活動は、友達作品のよさや面白さを見付け話し合うことを通して、「色」、「絵の位置」、「アイデア」という造形的な特徴による作品づくりのポイントに気付き、その後の自分の作品づくりに生かしていくという積極的な活動である。子どもたちの様子を見てみると、第一段階で作品づくりを楽しみ、一人1～5個作品ができてきたところで、自分の作品づくりに一通り満足し始めた。すると、もっとよい面白い作品はできないか、友達はどんなアイデアで作品をつくっているのだろうか、関心が、自分の作品から周囲の友達作品づくりの様子へと向き始めた。そこで、教師が次のような学習課題を示した。「鑑賞活動でお互いの作品を見せ合って、よさや面白さに気付いたり、自分の作品に生かせるポイントを見付けたりします。そして、そこで分かったことを生かして、さらにすごいビッグ作品づくりに挑戦します。」鑑賞活動が始まると、子どもたちは、気になる友達作品が置いてある机のところへ行って、どんどん回してそのよさを見付け始めた。「これ、回すと色がきれいだ。」「〇〇さんの絵が面白い。」「こんなアイデア、考えつかなかった。」など口々に感想を言い合いながら、友達作品のよさを見付けた。鑑賞活動を終えた後で、子どもたちによさや面白さを尋ねると、次のような意見が次々と発表された。

【発表場面での児童の様子】 (授業記録より)

- A児「よい作品のポイントは、表と裏で、絵が重なり合うように描くことです。」
 B児「表と裏のどちらかに絵を描きすぎないことです。描きすぎると、速く回したときに絵がよく見えなくなるからです。」
 C児「そうそう、ごちゃごちゃして、これ何なの？という感じになるからです。」
 D児「見せたいところは、他より濃く描くといいです。」
 E児「ふちどりをするとよく見えます。」
 F児「〇〇さんの作品を見たら、目立たせたいところは、少し大きく描くといいことが分かりました。」

教師は、発言を短い言葉でカードにまとめ、板書に貼った。その際、似ている内容ごとに、先ほどの「色」「形」「絵の位置」「アイデア」という造形的な特徴で分類して黒板にカード板書を行った。その様子が以下の【図1】である。

色	絵全体	位置・重なり
うすく こく	かきすぎない	表裏 絵の重なり
色をこく	×ごちゃごちゃ	重なり 左右の位置
同じ色を使いすぎない	目立たせる こく、ふちどり	中心は動かない
	目立たせる 大きく	表裏 同じ量
	シンプル	位置合わせ 穴あけ
	りんかくと線	

【図1】 第二段階 鑑賞後の黒板のカード板書

このように、黒板にカード板書したあと、教師が、それぞれをまとめる言葉がないか問うと、子どもたちは、図の上の「色」「絵全体」「位置・重なり」という言葉でまとめた。そして、その後自分の作品を見直して、もっとよくするには色を濃くすればいいんだな、ずれないようにピンで穴をあけて表と裏の位置を合わせよう、などつぶやく様子も一部に見られた。教師が考えた造形的な特徴を含んだポイントの言葉と少し異なるが、ここで子どもが自分たちの言葉で、よりよい作品づくりのポイントを明確にしたことによって、他の作品のよさを見付けたり自分の作品を直したりする際のはっきりした観点としてとらえることができたといえる。次に、授業の最初に予告しておいたビッグ作品づくりを始めることにした。

(4) 第三段階の様子

第二段階で、よりよい作品にするポイントに気付いた子どもたちは、もっとこうすればよくなる、あんなふうにつくりたいというはっきりとした作品づくりの見通しをもった。第三段階では、それを十分発揮させるために、ビッグ作品づくりを行う。ビッグ作品は、直径でそれまでの作品の約2倍の大きさになる。子どもたちは材料を持ちながら、「友達の作品を鑑賞してひらめいた新しいアイデアでつくろう。」などつぶやきながら作り始めた。作業の途中では、「大きいから、位置をしっかりと合わせないと、回ったとき合わないのが目立つよ。」「広い面積だから、色をたくさんぬらなくちゃ。」など話す声が聞こえてきた。子どもたちは、掲示された作品づくりのポイントをもう一度振り返って新しい主題を想像したり、最初につくったものをさらによくするための構想を考えたりしながら、積極的にビッグ作品をつくった。第三段階での作品づくりの様子は、友達の作品や学習のまとめから学んだよさ生かして、もう一度自分の作品の修正をする形でビッグ作品づくりをしていった子どもがほとんどであった。つくっている最中、「大きくなった分、色ぬりが大変だけど、絵の印象も強くなるな。」などさまざまなつぶやきが聞こえた。そしてビッグ作品を一つつくと回し始め、友達同士貸し合って回して楽しんだ。その後は、もう一つつくりたいという子どもはなく、完成作品であることが分かるのであった。



【G児の活動後の感想】(第三段階終了後の子どもの記録カードより)

私は分かったことと感じたことがあります。鑑賞会で分かったことは、ごちゃごちゃ描かない、位置に気を付けることです。これを生かして最後のビッグ作品をつくったら、分かりやすい面白い作品ができました。感じたことは、絵を描くときは、構図や色あいが大事なあとということです。

自分の手で十分楽しみながらつくった結果、自分の表現に自信をもち、交換しながらお互いの作品の面白さを楽しむ姿が子どもたちの成就感、充実感を表していると考えられる。

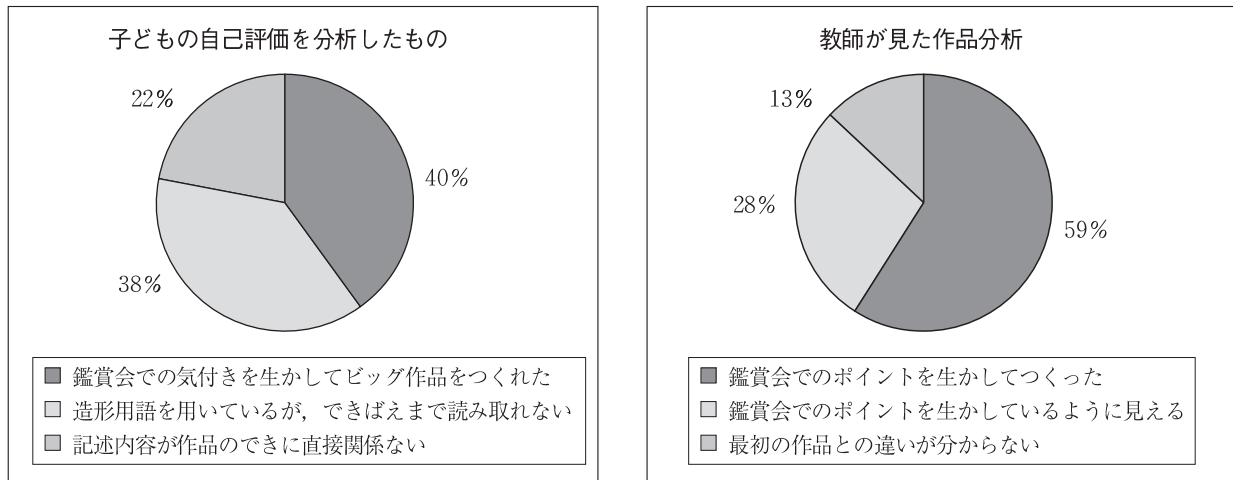
題材全体を通して、子どもたちは、話し合ってみつけた造形的な特徴にかかわるポイントに気をつけながら仕組みを考えてつくと、絵が動いて楽しいということを体験することができた。つくり方のポイントに気付いたことを生かして、思いっきりつくって満足した様子が、つくった作品からも、最後の記録カードの感想の記述からもとらえることができる。本題材でねらった、絵は平面で動かないものだけではなく、絵を動かしたり合成したりすることができるということを、作品の変化から、子どもたちに十分とらえさせることができたといえる。その際、第二段階での鑑賞会による造形的なポイントの把握、確認が有効な手立てとして子どもたちの造形的な思考力を育むのに役立っていることが分かった。

5 研究のまとめ

(1) 鑑賞と作品づくりについて

研究の目的と方法にあげた、鑑賞活動を途中に行うと、色、形、主題、構成、技法といった造形的な特徴に気付いて表現が深まる点について考察する。子どもたちは、第一段階で、形や色、位置や組み合わせといった造形的な特徴を意識せず、どんどん9センチのソーマトロップをつくっていった。【表1】から、図案を思いつく子どもは、個数も多くつくる傾向が見て取れる。これらは、参考作品からイメージした自分のアイデアを自然につくったためであると考えられる。当然、すぐには表現活動に入れない子どもも現れた。感想の中に、「全部うまくつくれなかった。バランスをよくすればうまくいきそう。」や「考えすぎて、表裏の向きが合わなかった。スムーズにできたらいい。」などの記述が見られる。その後、第三段階終了後の子どもの記録カード(感想について自由記述)を見ると、以下の【表2】のような結果となった。第二段階の話し合いで明らかにした、形や色、位置や組み合わせといった造形的な特徴による作り方のポイントを生かして、ビッグ作品をつくることができたと記述されたものが40%(32人中13人)、明らかにした造形的な特徴によるつくり方のポイントに使われた言葉を用いて自分のビッグ作品のできばえについて述べているものが38%(32人中12人)である。

【表2】第三段階後の子どもと教師の評価



もう一方の教師がみた作品分析では、59% (32人中19人) が、鑑賞活動によって作品づくりが促進されたととらえた。これより、学習の途中、第二段階で鑑賞活動を行うと、子どもの制作過程において有効であると考えられる。記述の面から見ると、色、位置、構図、重なり、組み合わせ、大きく描く、細かく描きすぎない、シンプルなどの言葉が多数見られること、それぞれを関連させた記述が見られることから、理解が深まったことが指摘できる。

また、第三段階でビッグ作品をつくり終わった後、子どもはそれ以上つくろうとせず、友達同士貸し借りして遊び始めた。最後の記録カードには、造形的な特徴にかかわる言葉が多く使われ、作品づくりの満足感が読み取れた。これらのことから、作品の完成を自分で決めていったと考えられる。

(2) 評価上の課題

以上の取組を分析するにあたり、課題もはっきりしてきた。

一つめは、分析の基準である。造形的な特徴を表す言葉の数、使用された造形的な言葉と作品のでき具合との関連から子どもの記述を分析していったのであるが、授業した教師一人のとらえであるところに限界がある。もう一つは、数値の相関関係である。数値上は、値が高いのであるが、第一段階と第三段階の比較において、子ども一人一人、前後の比較を行っていない。そのため、一人の子どもの中において、数値の変化、記述の変化があったのかが明らかになっていない点である。これらについて、各段階での子ども一人一人の変化について比較分析することができると、結果をより確かなものにできると考えられる。

(3) まとめ

以上のようなことから、造形的な特徴にかかわる言葉に着目して話し合う鑑賞活動を学習の途中に設定することは、子どもの造形思考を活発にし、他のよさを取り入れたり、自分の作品の完成を自分で決めたりすることにおいて十分有効である。今後は、この短時間の鑑賞活動を、子どもの実態に合わせ、いつ設定していくかについても検討していくことが、研究の有効性を高めるものになっていくと考えられる。

参考文献

- 「図画工作 5・6年上 教師用指導書上巻 研究編」 監修：林建造 花篤實 辻田嘉邦 宮坂元裕 2005 日本文教出版株式会社
- 「小学校学習指導要領解説 図画工作編」 平成11年5月文部省 1999日本文教出版株式会社
- 「絵画の教科書2001」 監修：谷川渥 編者：小澤基弘 渡邊晃一 2001日本文教出版株式会社
- 「造形教育事典」 監修：真鍋一男 宮協理 1991建帛社
- 「自分の心でとらえる鑑賞」(日文図画工作・美術指導資料2003) 編著者：古田洋司 2000 日本文教出版株式会社